

# イボタノキの秋発芽実生について

著者	梅林 正芳
著者別表示	Umebayashi Masayoshi
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	44
号	1-2
ページ	90-91
発行年	1996-12-30
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00055587">http://doi.org/10.24517/00055587</a>



する。葉鞘は重合型で節間より長く、縁辺に斜上する2.5-3 mmの直毛を列生し、表面は脈明瞭で脈間に長さ2.5-3 mmの有疣毛がある。

花序は高さ15-30 cmで、長さ3-12 cmの総が多数(20-40本)互生または半輪生状に斜上してつくが、上になるにしたがい総は短くなる。総の主軸につく基部には3-5 mmの直毛が数本ある。各総の左右に交互に短い枝をつけ、2個の小穂が着く。小穂は長さ1.5 mm、厚さ0.5 mmの半球状で表面に白色短軟毛を疎生し茶褐色で1小花。第一、第二苞穎とも薄膜質で1脈、大きさは小穂と同じ。小花の護穎、内穎ともに光沢のある膜質で、護穎は1.4 mmで半球状、内穎は1.3 mmで扁平。柱頭は羽毛状で紫黒色。鱗皮は長さ0.3 mm。小花内の葯の長さ0.8-0.9 mm、開花時の葯は葯室の下部が開きX字状となり、上端部が開く孔裂葯で、開口部の径は0.3 mmで縁辺は肥厚し白色、基部の角状の部分は紫黒色。

#### 引用文献

Judziewicz, E. 1990. Poaceae. In Gortz-van Rijn, A. R. A. (ed.): Flora of the Guianas, pp. 498-499. Koeltz Scientific Books, Koenigstein.

(〒654-01 神戸市須磨区妙法寺岩山1054-3 Aza Iwayama 1054-3, Myouhouji, Suma-ku, Kobe 654-01, Japan)

○ 梅林正芳: イボタノキの秋発芽実生について Masayoshi Umebayashi: Autumn Germination in *Ligustrum obtusifolium* (Oleaceae)

筆者は1986年頃から樹木の实生の形態の観察、研究を目的として播種栽培をしている(山中他 1992, 1993, 1994, 1995 a, b)。その過程でイボタノキの实生について興味深い事実が観察されたので報告する。

1995年秋に富山県大沢野町牛ヶ増で採取したイボタノキの種子を、パーミキュライトのみの播種床に播種し、直接雨のかからない日陰に置いて観察していたところ、1996年秋に発芽して子葉を展開し、さらに続けて初生葉も伸びはじめた。樹木では、秋に発芽し子葉だけでなく初生葉も展開することは、珍しいことと思われる。播種の際には果肉を取り去り、水洗して採取翌日に播種したので、本来春に発芽するものが二次休眠した結果、秋になったとは考えにくい。

アオキやヒメアオキは秋に発芽して子葉のみが展開し、その段階で越冬して翌春初生葉を出すことはよく知られている。私が播種栽培した中では、キンギンボクがアオキと同様の発芽習性を示した。コナラやアラカシなどのドングリは播種当年の秋に根のみを出し、子葉を地中にとどめたまま翌春に茎を地上に伸ばすし、サワフタギなどでは播種翌年に根のみ発芽し子葉は次の年の春に展開することを観察しているが、これらは秋に地上部は出ないので、今回のイボタノキの場合とは異なる。

山中(1975)にはイボタノキ属5種についての記録があるが、いずれも播種翌年の春に発芽しているし、私もネズミモチとミヤマイボタが播種翌年の春に発芽したことを観察している。今後もっと多くの個体で同属他種との比較をも含めて観察する必要があるが、とりあえず報告することにした。

#### 引用文献

山中寅文. 1975. 日本産主要樹種の発芽型と育苗図 18 イボタノキ他. 「植木の实生と育て方」, p. 48. 誠文堂新光社, 東京.

山中典和・永益英敏・梅林正芳. 1992. 芦生演習林産樹木の实生形態 1. アケビ科, ウルシ科, ミズキ科, エゴノキ科, ハイノキ科, クマツヅラ科. 京都大学農学部附属演習林集報 23: 47-68.

山中典和・永益英敏・梅林正芳. 1993. 芦生演習林産樹木の实生形態 2. クルミ科, カバノキ科, ブナ科, クワ科. 京都大学農学部附属演習林集報 25: 52-72.

山中典和・永益英敏・梅林正芳. 1994. 芦生演習林産樹木の实生形態 3. ビャクダン科, マタタビ科, ツバキ科, マンサク科, トウダイグサ科, ユズリハ科, ミカン科, モクレン科, マツブサ科. 京都大学農学部附属演習林集報 26: 30-53.

山中典和・永益英敏・梅林正芳. 1995a. 芦生演習林産樹木の实生形態 4. モチノキ科, ニシキギ科. 植物地理・分類研究 42: 111-124.

山中典和・永益英敏・梅林正芳. 1995b. 芦生演習林産樹木の实生形態 5. ブドウ科, アワブキ科, ウリノキ科. 植物地理・分類研究 43: 25-36.

(〒920-11 金沢市角間町金沢大学理学部生物 Department of Biology, Faculty of Science, Kanazawa Uni-

versity, Kanazawa 920-11, Japan)

○ 梅林正芳・植田邦彦：ウリノキの雄蕊数と花弁数 Masayoshi Umebayashi and Kunihiko Ueda: Petal Numbers and Stamen Numbers in *Alangium platanifolium* var. *trilobum* (Alangiaceae)

ウリノキ科 Alangiaceae はウリノキ属 20 種ほどと新世界に 1 属 (3 種) が知られている木本性の小さな科で、日本には 2 種が自生している。ウリノキは北海道から九州までの山地に普通に見られ、朝鮮、中国にも分布しており、変種モミジウリノキは本州西部から朝鮮にかけて知られる。九州南端から琉球列島にかけてはシマウリノキが分布している。ウリノキの花序は集散花序で多くは 3 花をつけ、時に 2, 4, 5 花のものが見られ、頂端の花よりほぼ順に開花していく。ところがそれらの花を見ていると、どうも図鑑の記載とは合わないことに気がついた。我々が調べた限りの植物誌、図鑑でウリノキの花弁数・雄蕊数に言及しているものすべてにおいて、ウリノキは「花弁 6 個、雄蕊は 12 個」となっており、シマウリノキは「花弁 7 個」(大橋 (1989) では後者の雄蕊数について唯一言及があり、7 個とされている) と記載され、その上さらに、花弁数は両種の検索にも使われている (牧野 1940, 1961; 奥山 1957, 1977; 北村・村田 1971; 大井 1978; 林 1985; 大橋 1989; 小野他 1989; 雄蕊数に言及のないものは引用せず)。

しかし、我々が収集したウリノキで検討した結果は、これらの記載とは大きく異なるものであった。すなわち、132 花序、401 花 (富山県上市町 16 花序、同利賀村 14 花序、同八尾町 23 花序、同大沢野町 14 花序; 金沢市犀川ダム近辺 8 花序、同内川ダム近辺 57 花序) を調べてみたが、その結果、表 1 に示すような事実が判明した。すなわち、244/401 が花弁数 7、雄蕊数 7 で、次に 89 花が花弁数 8 で雄蕊数が 8、花弁数 6 雄蕊数 6 が 43 花、その他はごく少数であることがわかった。このことから、1) 花弁数と雄蕊数は同数であり、稀に異なる場合でも雄蕊数が花弁数の 2 倍あるものはない; 2) 花弁数は 7 が半分以上を占め、ついで 8 枚、6 枚の順となる; 3) 花序内の花の位置とこれらの数についてはまったく相関がないこと、がはっきりと指摘できる。調べた地域が偏っているおそれがないとは言えないので最終的なことは言えないが、少なくとも金沢から富山にかけての地域のウリノキは従来の記載とは明らかに異なる花をもつことは確かである。

したがって、シマウリノキとウリノキとの区別において花弁数は種差を表すキー形質として使えないし、ウリノキの雄蕊数は花弁数と同数で、多くの場合は 7 で時に 8 または 6 ということになる。

Table 1. Numbers of petals and stamens in 401 flowers (132 inflorescences) of *Alangium platanifolium* (Siebold et Zucc.) Harms var. *trilobum* (Miq.) Ohwi

Flowering Order Petal nos. / Sta- men nos.	1	2	3	4	5	計
P 5 S 8	—	1	—	—	—	1
P 6 S 5	—	—	1	—	—	1
P 6 S 6	15	12	11	3	2	43
P 6 S 7	2	—	1	—	—	3
P 7 S 6	1	5	1	—	—	7
P 7 S 7	76	78	74	13	3	244
P 8 S 6	1	1	—	—	—	2
P 8 S 7	3	2	4	—	—	9
P 8 S 8	30	33	22	4	—	89
P 9 S 8	1	—	1	—	—	2
	129	132	115	20	5	401

旧世界のウリノキの類は現在では *Alangium* に分類するのが一般的であるが、かつては花弁数と同数の雄蕊をもつ *Marlea* と、2 倍数の雄蕊をもつ *Alangium* とを認めることもあった。今回調べた著作では大橋 (1989) を除き、ウリノキ科には新大陸のものを含まずにウリノキ属のみを認め、「雄蕊は花弁と同数または 2 (-4) 倍数」と記されている。この意味で、唯一の例外が中井 (1928) の記載で、花弁数 8、雄蕊数 8 となっており、